



松浦武四郎篇3

嘉永6年

時を遡る嘉永6年（1853）。この年の大きな出来事といえば、「黒船来航」。6月、ペリーが率いるアメリカ海軍の艦船（黒船）4隻が現在の神奈川県横須賀市浦賀に来航しました。また、8月にはロシアの艦隊も長崎に来航し、開国を求めました。アメリカは、日本を中国との貿易船や捕鯨船の中継地とするため、日本に開国を求めたのでした。

武四郎は蝦夷地の調査を行うようになってから、幕末の数多くの志士との交流がありました。8月末日、武四郎は志士たちから重要な任務を頼まれます。攘夷（じょうい／外国を撃退し、鎖国を続けようとする）の宣下（せんげ／天皇の命令を伝える公文書）が出されるように働きかけることを求める密書（秘密の手紙）を朝廷に届けることでした。10月2日、江戸から京都へと向かいました。25日には京都での任務を終え、28日は江戸への帰途につきました。

翌29日は、桜井、初瀬を経て、萩原から伊勢本街道を通って伊勢神宮へと向かう途中、上田口（田口元上田口）の「布袋屋（ほていや）」という旅籠に泊まっています。武四郎が泊まった旅籠は残っていませんが、この跡地には、「北海道の名付け親 松浦武四郎 嘉永6年10月29日 宿泊布袋屋跡」と書かれた案内板が建てられています。

上田口村は、伊勢本街道の宿場のひとつで、かつては多くの旅籠が建ちならび、従来する旅人で賑わいました。ここに残る旧飯岡家住宅（国登録文化財）は、上田口村の庄屋をつとめたと伝えられ、紀州藩主が伊勢参詣の際にここを利用したといわれています。

武四郎が残した資料のうち、1505点が重要文化財に指定され、「松浦武四郎資料館」（松阪市小野江町）で収蔵・展示が行われています。「松浦武四郎誕生地」とあわせて、ご覧ください。

